『指輪物語』における「死」の心象風景
—墳墓・船葬・塚人—

辺見　葉子

J. R. R. トールキンが描き出す中つ国（ミドル・アース）において、墳墓は「死」そして「死すべき運命」(mortality)の表象として、その心象風景に大きな位置を占めている。中つ国（ミドル・アース）に棲む者は多種多様だが、大別するならば、不死なるエルフと、人間やホビットなど死すべき者とに二分される。トールキン自身が言っているように、『指輪物語』は「死と不死性」('Death and Immortality')を主題とする物語なのである。[1] すなわち人間やホビットなど、死すべき運命にある者のこの世への愛着／執着と、それと対比されるエルフの不死の運命がもたらす苦悩——つまり自らは変化することのない存在として、この世を愛しながらもその儚い移ろいを見届けなければならず、この世が続くかぎりその円環から逃れることが出来ない者の哀しみ——とが主題なのである。言い換えるならば、『指輪物語』は「死」を二つの異なった視点から見た物語である。ただし、二つの視点が共存してはいるものの、当然書き手であるホビットの——死すべき者の——視座が物語全体を覆うトーンを決定している。だからこそ「死」そして「死すべき運命」の表象としての墳墓が圧倒的な存在感を持っているのである。

[Sutton Hooと『ベーオウルフ』]

トールキンの学門専門領域がアングロ・サクソン語（古英語）文学であり、彼の中つ国（ミドル・アース）の言語世界（後述するように特にロヒリムの言語）にその学識が盛り込まれていることは周知のとおりだが、一方、彼の物語世界に登場する墳墓には、アングロ・サクソンに関するポピュラー・イメージが反映されていると思われる。現代の英国人にとって、墳墓といえばまず思い浮かべられるのは、アングロ・サクソン時代の遺跡、サットッン・フー(Sutton Hoo)であろう。ロンドンの北東およそ70マイル、サフォクシアにある古墳群である。この中の一つから、1939年の発掘調査の結果、長さ27m、幅4.5m、深さ1.5mもの船が、数多くの素晴らしい宝物と共に発見された。埋葬塚の中の、木製だった船の本体はむろん朽ちてしまって存在しないが、釘の跡がくっきりと船の形を浮かび上がらせている。埋葬室には遺骸が納められた跡はない。この一種の船葬にふされた人物については諸説あるが不明である。船葬という埋葬形式は、海のかなたに死者の国があるという信仰を背景としているため、この人物の前キリスト教的なアスペクトを示唆しているように思われる。船は死後旅をするための手段であり、墓に船（ミニチュアの場合もあり）を入れるのも同じ発想だと思われる。[2] しかし埋葬品からは、キリスト教の影響も明らかに認められる。そこで、イーストアングリアで初めてキリスト教徒に改宗したが、その後また異教に戻ったという624年ないし625年没のRædwald王が筆頭の候補として挙げられていたが、現在は疑問視されている。[3] 本稿で注目したいのは、Sutton Hooがその発見当初から、アングロ・サクソン文学を代表する英雄叙事詩『ベーオウルフ』(*Beowulf*)と結びつけられ、その結びつきから生まれたアングロ・サクソン世界のポピュラー・イメージは、『指輪物語』にも投影されているという点である。『ベーオウルフ』とSutton Hooというカップルが互いに「一目惚れ」の関係であったことは、1939年の発見当初から明らかであった。[4] 大発見を報じた新聞においてすでに、『ベーオウルフ』がSutton Hooの特にその宝物の解釈に光を当てるものとして言及されている。[5]

この両者の間に生まれた連想は、1947年に大英博物館から出版されたガイドブックでも追認され、いわばお墨付きを与えられた。『ベーオウルフ』の校訂本の編者として名高いC. L. Wrennも、Sutton

Hooの発見が『ベーオウルフ』の描写に歴史的背景を与えていると評価している。[6] こうして『ベーオウルフ』で描かれた宝物は、Sutton Hooの発掘物と同一視され、現実の貴金属の輝きを帯びるようになった。ドラゴンが宝物を護る墳墓も、ベーオウルフの埋葬塚も、そしてスキュルドを載せて海へと送り出された船も、ファンタジーの世界から抜け出して実体化したのである。現在でこそ、両者を安易に結びつけることに学者は慎重な姿勢をとっているが、Sutton Hooと『ベーオウルフ』が互いにアングロ・サクソン世界を照らし出し合う関係にあるという観念は、無論但し書きつきでは認められることであり、少なくともとうの昔にポピュラー・イメージの中に定着してしまっている。[7] トールキン自身も、1936年の有名な『ベーオウルフ』に関する考察 '*Beowulf*: The Monsters and the Critics' において、この文学作品がこの時代の雰囲気と思想を研究するための歴史的資料として第一級のものであると述べている。[8]

『ベーオウルフ』は、英文学では現存最古の完全な形で保存された英雄叙事詩である。頭韻を基本とするアングロ・サクソン語で書かれた韻文、3182行から成るこの物語の成立は、680年～800年の間と考えられており、唯一の現存写本は1000年頃のものである。[9] 作者は不詳だが、キリスト教聖職者で、マーシア（イングランド中南部のアングル族の古王国）の宮廷と関係があった人物と思われる。物語の舞台は現在のデンマークと南スウェーデンである。『ベーオウルフ』の冒頭では、ベーオウルフの父スキュルドの船葬が物語られる。王の遺骸は宝物と共に船にのせられ、海に送り出される。厨川文夫訳で引用する：

> 「さるほどに猛きスキュルドは定命満ちて天帝の御加護のもとへ去り逝き給ひぬ。股肱の臣だちは、スキュルディンガスの君が御詞を司り給ひし頃自ら命じ給へる所に従ひて渡海の潮の流れへ君を運び行けり。慕はしき君、久しく民を治め給ひしが....。港には舳先に環をつけたる船、貴人の船、氷もて被はれ、今や纜を解かむとして立てり。かくて人々は親しき君、宝環を施し給ふ君、その名隠れなき君を船の懐、檣の傍に横たへぬ。其処には遥かなる土地より齎される数多の宝、飾りものありき。我未だ嘗てこれに勝りて麗しく武具、戦衣、剣や鎖子鎧もて船を装ひしためしを聞かず。彼が胸の上には宝のかずかず横たはりてありき。それらは彼と共に潮の蔵へ遠く去りゆくものなりき。些かたりともこの人々は、その始め幼なき君を唯ひとり浪の上へ送り出せし人々の供へしよりも少なき捧物、より少なき宝の山を彼に供へ奉りしにあらざりき。更にまた人々は君の頭上高く金色の旌旗を掲げて、潮の彼を運ぶに委せ、彼を大海に与へしなり。人々の心は悲しく、胸は嘆きに満ちたりき。館の参議も武士も、天下の人々この物貨を受けしは何者なるかを真に語り得るもの絶えてなかりき。」[10]

そして物語の最後には、老王となったベーオウルフ自身の葬儀が語られる。火葬、泣き女の哀歌、そして埋葬塚への安置、塚の周りを騎馬で挽歌を誦いながら廻るという一連の儀礼が描写される：

> 「茲に於てかゲーアタスの人々は、彼[ベーオウルフ]が求め給ひし如く、彼がため地上に堂々たる火葬の積薪をしつらへ、周囲に吊るに冑、戦いの楯、輝ける鎖子鎧を以てせり。然る後武士らは嘆きつゝ、誉れ高き主君、親しき殿を中央に横たへぬ。さて武士らは岡の上に葬の火の最も大いなるものを点ずることに取掛りぬ。木より出づる黒き煙は焔の上に立ち上りき。鳴り響く焔は嘆きの声もて囲まれたりき――風の騒ぎは静まりぬ――軈てそは[焔は]胸の中に熱くかの骨の館[体]を滅し尽しぬ。
>
> 心悲しき彼らは魂の悲しみ、主君の死を嘆きぬ、又かの結へたる髪もてる悲めるかの老女は、ベーオウルフに就きて哀歌を唱ひ、彼女は己れに対し悪しき日々を、数多の殺虐を、武士の恐怖を、屈辱と虜とを甚く怖るゝことを繰返し繰返し語りぬ。天は煙を呑みぬ。

茲に於てウェデラスの人々は崖の上に塚を造りき。そは高く、広くして、船人らには遠くより望まれたりき、而して彼らは十日の中に戦に猛き君の記念塚を築き上げぬ。彼らは、いみじう才ある人々が善美を尽して考案し得たる様にして壁もて火の遺物[灰]を囲みぬ。彼らは宝環や宝石、曩に猛き人々が蔵宝の中より奪ひたりしが如き飾装のものを尽く塚の中へ置きぬ。彼らは武士らの富、黄金を砂中に、大地の護るに委せしなり。そは今日も尚其処に、その昔に於けると同じく人々に用なきものとして存す。

軈て戦に雄々しき貴人の子ら総勢十二人、塚の周囲を馬に跨りて廻りつ。彼らは己（が身の上）を嘆き王を悼み、挽歌を誦し、而して（その）人物[ベーオウルフ]に就きて語らむと思ひしなりけり。武徳を讃へ、又彼の武勇の業をいみじう賞めそやしけり。斯く、人己が殿を、現身より導かれ出でさせ給ふべき時に当りて、言葉もて讃へ、真心もて懐しむはつきづきしきことにぞありける。」[11]

『ベーオウルフ』という作品は、船葬に始まり、海に臨む墳墓への埋葬で終っているわけである。二つの葬儀の模様の他に、ドラゴンがその宝を護る古の墳墓も登場する。老王となったベーオウルフは、このドラゴンを一騎打ちの末に倒すが、自らも命を落とすことになるのである。作者は、スキュルドとベーオウルフという異教時代の二人の王であり武勇の誉れ高い戦士の魂の行方を、「この物貨を受けしは何者なるかを真に語り得るもの絶えてなかりき」また「天は煙を呑みぬ」と、前キリスト教時代を印象づけるべく語っている。この『ベーオウルフ』という文学作品における船葬と墳墓のイメージが、Sutton Hooの考古学的発見と重なり合い、ポピュラー・イマジネーションの中で、アングロ・サクソン世界に関するファンタジーが育まれてきたものと思われる。2002年にはSutton Hooの観光案内所のオープニングに際して、『ベーオウルフ』を現代英語訳したノーベル文学賞受賞詩人シェーマス・ヒーニーが、自らの『ベーオウルフ』の翻訳を朗読しているが、これはSutton Hooと『ベーオウルフ』との間に働く密接な連想の定着ぶりを示すエピソードであろう。

[ロヒリムの墳墓]

同種のアングロ・サクソンに関するポピュラー・イメージは、トールキンの『指輪物語』における墳墓の心象風景にも映し出されていると思われる。まずは、騎馬の民ロヒリムの墳墓と、セオデン王の埋葬の場面を見てみよう。トールキン自身は、ロヒリムとアングロ・サクソンを同一視することを拒んでいるが、[12] これは、自らの物語世界(Secondary World)が史実と同一視されることを拒否しているということであって、シッピーの指摘にもあるとおり、ロヒリムの言語はすべてアングロ・サクソン語、しかもスタンダードな古英語ではなく、マーシアの方言で表されている。[13] 'Rohirrim' はSindarin Elvish（トールキンが創った二種類のエルフ語の一つ）で 'Master of Horses' を意味する。彼らの王国ローハン（'Rohan'）は 'horse-land' の意であるが、ロヒリムたちの自称は 'the Mark' である。トールキンの故郷のバーミンガムおよび母校のオクスフォードは、アングロ・サクソン時代にはマーシア王国の一部であった。トールキン自身、自分のことを 'the English of Mercia' と称している。[14] シッピーによれば、現在に伝わる 'Mercia' という形はラテン語化された形であり、元来マーシアの隣国ウェスト・サクソンの言葉では '*Mearc' であったはずである。トールキンはこれをマーシアの言葉にするならば '*Marc'（発音はMarkと同じ）となったはずだと考え、'Mark' という名前を使ったのだという。[15] またこの 'the Mark' の旗のデザインは、「緑の野の白馬」なのだが、これはマーシア王国とウェセックス王国の国境付近に位置する有名な「アフィントンの白馬」（'the White Horse of Uffington'：青銅器時代の作とされる、石灰岩の丘陵に描かれ

た地上絵。緑の草地に全長110メートル白馬の姿が浮かび上がっている)に見出せる。[16] このように、ロヒリムがアングロ・サクソンの王国であるマーシアと重ね合わせられていることは明白である。ただし、ロヒリムは 'Master of Horses' の名前のとおり、まさに騎馬によって特徴づけられた民であるが、史実のアングロ・サクソンはその点においては全く異なっていた。ロヒリムの姿は、シッピーが指摘するように、史実のアングロ・サクソンではなく、文学伝承世界のアングロ・サクソンを映し出したものであろう。[17]

『指輪物語』は言うまでもなく現代英語で書かれた作品だが、トールキンは自らを、作者ではなく翻訳者と位置づけるという、手の込んだポーズをとっている。自分は「西方語」という中つ国(ミドル・アース)の共通語で書かれた写本に残された物語を、現代英語へ翻訳したのだというポーズである。トールキンの物語世界には独自の多元的な言語世界が展開されている。彼は、「西方語」を現代英語に訳したのだという姿勢をとることにより、両者はイコールではない、「西方語」は共通語として広く流布しているという点で現代英語に相当するものなので、現代英語に訳したのだと主張しているわけである。ロヒリムの言語と西方語の関係は、現代英語と古英語のそれと似ているため、ロヒリムの言語を翻訳するにあったって古英語を用いたのだと言う。[18] これも同様の中つ国(ミドル・アース)の史実からの自立性の主張である。

さて、読者がローハンで最初に出会う風景が墳墓である。左手に七つ、右手に九つの墳墓が並び、'*simbelmynë*' ('ever-mind', 'ever-memory', 'forget-me-not' の意)の白い花に覆われている。この花は「四季を通じて咲き、死者の奥津城どころに育つ」のでそう呼ばれているのだと、ガンダルフが解説する。[19] そしてアラゴルンがロヒリムの言葉で歌を唄うと、エルフのレゴラスはその言葉がその土地自身に似ている、そして「死すべき定めの人間の悲しみがいっぱいに盛られている」とコメントする。[20] アラゴルンは続けてこれを「共通語」(西方語)に翻訳する(それを翻訳者であるトールキンが現代英語にしているという設定なので、読者が目にするのは現代英語訳である)。

Where now the horse and the rider? Where is the horn that was blowing?
Where is the helm and the hauberk, and the bright hair flowing?
Where is the hand on the harpstring, and the red fire glowing?
Where is the spring and the harvest and the tall corn growing?
They have passed like rain on the mountain, like a wind in the meadow;
The days have gone down in the West behind the hills into shadow.
Who shall gather the smoke of the dead wood burning,
Or behold the flowing years from the Sea returning?[21]

「あの馬と乗り手とは、何処へいった?吹きならされた角笛はいまどこに?
兜と鎧かたびらは、風になびいた明るい髪の毛は、どこに?
竪琴をかなでた指は、赤く燃えた炉辺の火は?
春はどこに?稔りの時と丈高く熟れた穀物は、どこへいったか?
すべては過ぎていった、山に降る雨のように、草原を吹く風のように。
過ぎた日々は、西の方に、影を負う山々のうしろに落ちてしまった。
燃えつきた焚木の煙を集める者があろうか?
流れ去った年月の海から戻るのを見る者があろうか?」[22]

ローハンの始祖王エオルをうたった詩である。この詩は、'*Ubi Sunt*' と呼ばれる形式を用いている。'*Ubi Sunt*' は 'where are . . .' という意味だが、これはラテン語の説教文学で多用された修辞法であり、中世英文学においてもさかんに用いられた。[23] 例えば古英語の「挽歌」[24] として名

高い‘The Wanderer’という詩がその典型であるが、元来の宗教文学における現世の栄華の空しさへの警告というよりも、過去の黄金時代への郷愁と哀惜の念が強調されるようになった。‘The Wanderer’とトールキンの上に引用した詩との類似は明らかである。現代英語訳で引用する：

> Where is horse, where is man? where is the treasure-giver?
> Where are the festive sittings? where are the joys of the hall?
> Alas bright cup! alas mail'd warrior! alas chiefstain's spendour! how the time has pass'd, has darkn'd under veil of night, as if it had not been.[25]

この‘The Wanderer’の‘*Ubi Sunt*’の前には、朽ちて崩れた広間や、亡き誇り高い戦士たちが語られ、過ぎ去り失われた栄光への哀惜が主調となっている。トールキンのロヒリムの詩においても、王の広間で赤々と燃える炉の火や、竪琴の音が語られ、過去への郷愁の念が際立っているが、この詩の前景となっているのは、廃墟となった王の館ではなく、王の墳墓の数々である。現世の栄華の移ろいやすさを強調する‘The Wanderer’にたいして、トールキンのロヒリムの詩では、「死すべき定めの人間の悲しみがいっぱいに盛られている」というエルフのレゴラスのコメントにもあるように、『指輪物語』のテーマと関わる「死」の主題が墳墓という心象風景によって浮き彫りにされていると言えよう。

ロヒリムの王セオデンは戦場で息を引き取る際、「予の体は砕けてしまった。予は先祖たちのところに行く。かれら偉大な父祖たちと一緒でも、予はもうわが身を恥じることはない。予は黒い蛇を打ち倒した。陰惨な夜明け、そしてうれしい昼じゃ。やがて金色の夕暮れが訪れよう!」と語る。[26] アングロ・サクソン文学でおなじみの、英雄的死生観である。『指輪物語』の第三巻、『王の帰還』では、戦死したセオデン王の葬儀の模様が語られている。

> . . . and he was laid in a house of stone with his arms and many other fair things that he had possessed, and over him was raised a great mound, covered with green turves of grass and of white evermind. And now there were eight mounds on the east-side of the Barrowfield.
> Then the Riders of the King's House upon white horses rode round about the barrow and sang together a song of Theoden Thengel's son that Gleowine his minstrel made, and he made no other song after. [. . .]
>
> *Out of doubt, out of dark, to the day's rising*
> *he rode singing in the sun, sword unsheathing,*
> *Hope he rekindled, and in hope ended;*
> *over death, over dread, over doom lifted*
> *out of loss, out of life, unto long glory.*[27]

> 「かの王は石室に、武器とかれが所有していたほかの多くの立派な品々と一緒に横たえられ、その上には大きな塚山が築かれて、緑の芝と白い忘れじ草でおおわれました。これで塚原の東側には八個の塚山が並びました。
> その後王家直属の騎士たちが白馬にまたがって塚山の周りを巡り、王の吟遊詩人グレオヴィネの作った、センゲルの息子セオデンの歌を声を合わせて歌いました。
> （中略）
> 疑念から出、暗黒から出て行き、日の上るまで、
> 王は日を浴びて歌いながら、剣を抜いて馬を駆った。

王は望みの火をふたたび点し、望みを抱きつつ果てた。
死を越え、恐れを越え、滅びを越えて
人の世の生死をぬけて、永久の栄えに上っていった。」[28]

これが、上に引用した『ベーオウルフ』におけるベーオウルフの葬儀の場面と重なり合うことは、明白であろう。『ベーオウルフ』にも騎士たちが埋葬塚の周りを廻る場面があったが、これはフン族の王アッティラの葬儀において、騎士が王の遺骸の周りを挽歌を唱しながら廻ったというヨルダネスの描写と比較されてきた。[29] 遺骸や墓の周りを廻るという儀式自体は、各地に見られる風習であるが、[30] トールキンがロヒリムのセオデン王の葬儀の描写にこれを取り入れた時、『ベーオウルフ』およびヨルダネスによるアッティラの葬儀を意識していたことは間違いない。シッピーが指摘するように、トールキンはAttilaの名前がゴート語(Gothic)で「父親」(*'atta'*)の指小語であり、'little father'(*'atti-la'*)を意味するという説に言語学者として大いに興味を覚えていた。[31] これはアッティラの陣営に多くのゴート人の存在があったことを示唆するというわけである。シッピーは、この説を 'perhaps the most romantic of all philological revisions of old data' と呼んでいるが、[32] ゴート語は最古のゲルマン系言語であり、トールキンを初めて魅了した言語であった。[33] トールキンはローハン王国の始祖エオル以前のロヒリムの人名には、古英語でなく、ゴート語を用いている。[34] ゴート人('Goths')が 'Horse-folk' の意だという伝承もあり、シッピーはこれもトールキンは知っていたはずだという。[35] また、ロヒリムの兜には馬の尾の飾りがついているが、これはフン族やタタール人、大草原地帯の部族の伝統的特権だという。[36] このようにトールキンは、ロヒリムという極めてアングロ・サクソン的な面影の濃い部族に、ゴート人やフン族といった騎馬民族の要素もかぶせ、'Master of Horses' としてのロヒリムをつくり上げたわけである。その際、アングロ・サクソンやフン族の「異教的残酷さ」は消し、[37] 英雄的な騎馬戦士たちの世界を現出させたのだと言える。

[船葬]

『ベーオウルフ』の冒頭に登場するベーオウルフの父王スキュルドの船葬の場面もまた、『指輪物語』の中に投影されている。ホビットを守ろうとオークと戦って討ち死にした、ゴンドールの執政の息子ボロミアの船葬の場面である。ボロミアを載せた小舟は、アンデュイン河の流れに委ねられる。'The River had taken Boromir son of Denethor' という一節に込められたセンティメントは、『ベーオウルフ』の「天は煙を呑みぬ」を思わせる。

> Now they laid Boromir in the middle of the boat that was to bear him away. The grey hood and elven-cloak they folded and placed beneath his head. They combed his long dark hair and arrayed it upon his shoulders. The golden belt of Lorien gleamed about his waist. His helm they set beside him, and his lap they laid the cloven horn and the hilts and shards of his sword; beneath his feet they put the swords of his enemies. Then fastening the prow to the stern of the other boat, they drew him out into the water. They rowed sadly along the shore, and turning into the swift-running channel they passed the green sward of Parth Galen. The steep sides of Tol Brandir were glowing: it was now mid-afternoon. As they went south the fume of Rauros rose and shimmered before them, a haze of gold. The rush and thunder of the falls shook the windless air.

Sorrowfully they cast loose the funeral boat: there Boromir lay, restful, peaceful, gliding upon the bosom of the flowing water. The stream took him while they held their own boat back with their paddles. He floated by them, and slowly his boat departed, waning to a dark spot against the golden light; and then suddenly it vanished. Rauros roared on unchanging. The River had taken Boromir son of Denethor, and he was not seen again in Minas Tirith, standing as he used to stand upon the White Tower in the morning. But in Gondor in after-days it long was said that the elven-boat rode the falls and the foaming pool, and bore him down through Osgiliath, and past the many mouths of Anduin out into the Great Sea at night under the stars.[38]

「そこで三人は、ボロミアを運び去る船の真ん中に死者を安置しました。灰色の頭巾とエルフのマントは折り畳んで、頭の下に置かれました。色の濃い長髪は梳られて、両肩にかかるよう形を整えられました。その腰にはロリアンの金のベルトが光りました。胄はかたわらに、膝の上には割れた角笛と、剣の柄と折れた刃とが置かれました。足許にはかれが討ち取った敵の剣が積まれました。それから三人は船のへさきを他の一艘の船の船尾につなぎ、かれを河の流れの中に引っ張って行きました。三人は暗然として、岸沿いに船を漕ぎ進めました。それから流れの速い水脈の中に船を乗りいれ、パルス・ガレンの緑の草地を通り過ぎました。トル・ブランディアの急峻な山腹が陽に照り映えています。午後もちょうど半ばでした。南に行くにつれて、ラウロスの水煙が立ち昇り、金色の霞となってきらめくのが見えました。大瀑布の奔流と轟音が風のない大気をゆるがしていました。

悲しみにくれながら、三人は葬送の船のともづなをほどきました。それはボロミアが安らかに眠り、流れる水の懐に抱かれて川面を滑って行く船でした。水の流れにかれを委ねてから、三人は自分たちの船を櫂で押し戻しました。亡骸を乗せた船は傍らをしばし漂ったかと思うと、ゆっくり離れて行き、みるみる遠ざかって、黄金色の光に浮かぶ黒い点となり、やがてたちまち姿を消してしまいました。ラウロスは相変わらず轟々とたけり続けていました。大河はデネソールの息子ボロミアを受け取ったのです。朝毎に白の塔に立つ彼の勇姿はもう二度とミナス・ティリスに見られることはないのです。しかしゴンドールではその後長いこと語りつがれていきました。エルフの船が大瀑布を越え、泡立つ淵を渡り、かれを運んでオスギリアスを通り抜け、アンドゥインのたくさんの河口を過ぎて、ある夜星空の下大海へ放たれて行ったと。」[39]

ボロミアの姿はラウロスの大瀑布に呑まれた後は不明なわけだが、最後はスキュルドと同様、最後は大海原に委ねられたのだと信じられている。これは後にボロミアの弟ファラミアによって確認されている。オスギリアスに近いアンドゥインの水辺でボロミアをのせた小舟を目撃し、それが「大河を下り、海に去って行ったことを疑わぬ」というのだ。[40]

ボロミアを見送った後には、アラゴルンとレゴラスがボロミアへの「挽歌」をうたう場面がつづく。西風、南風、北風に行方の知れないボロミアのたよりを尋ねるという、*Ubi Sunt*の変形のような形式をとっている。[41]

[塚人]

ロヒリムの墳墓や葬儀、またボロミアの船葬が、『ベーオウルフ』をはじめとするアングロ・サク

ソン文学およびSutton Hooの遺跡にまつわるファンタジーを色濃く反映するものであるとしたら、「霧の塚山丘陵」('Fog on the Barrow-Downs')に登場する墳墓とそこに棲む「塚人」('Barrow-wights')は、アングロ・サクソンより遥かに時を遡った、先史時代の墳墓にまつわる民間信仰のレベルでの心象風景を映し出しているものと言えるだろう。塚山丘陵の風景は、「丘の頂はすべて緑の塚となっていて、その中には、まるで緑の歯ぐきからぎざぎざの歯が突っ立っているように、天を指して林立する石の見えるところもありました。何となくこれは不安な光景でした」と導入される。[42] ホビットたちは、彼らには遠い過去の伝説に属する時間を垣間見て、漠然と不安と恐怖を覚えたわけである。ホビットたちは真ん中に一本の石が立つ円形の窪地で、石の東側[43] に背中をもたれさせると眠りに落ちてしまう。このスタンディング・ストーンは「いかにも意味ありげ」で、「境界の目印のようでもあり、守護する指のようでもあり、あるいはむしろ警告のしるしのようでもありました。(中略) 石はまるで日の光もそれをあたためる力がないかのようにひいやりしていました。」[44] ホビットたちは目を覚ますと、霧に閉じ込められてしまったことに気づき、「まるで落ち込んだ罠が次第に締めつけてくるような」気分になる。四人のホビットははぐれないように、フロドを先頭に一列になって霧の中を進んだのだが、やっと出口らしきものが見えたと勇んで先を急いだフロドの眼前には、二本の巨大なスタンディング・ストーンが突然姿を現す。そして後の三人とはぐれてしまったことに気づくのである。必死で三人を探すフロドの耳に、助けを求める声が聞こえ、暗闇の中、声がしたと思われる方向に闇雲に進むと、霧の帳が巻き上げられ、大きな古墳がぬっと黒い姿を現す。

'Where are you?' he cried again, both angry and afraid.

'Here!' said a voice, deep and cold, that seemed to come out of the ground. 'I am waiting for you!'

'No!' said Frodo; but he did not run way. His knees gave, and he fell on the ground. Nothing happened, and there was no sound. Trembling he looked up, in time to see a tall dark figure like a shadow against the stars. It leaned over him. He thought there were tow eyes, very cold though lit with a pale light that seemed to come from some remote distance. Then a grip stronger and colder than iron seized him. The icy touch froze his bones, and he remembered no more.

When he came to himself again, for a moment he could recall nothing except a sense of dread. Then suddenly he knew that he was imprisoned, caught heopelessly; he was in a barrow. A Barrow-wight had taken him, and he was probably already under the dreadful spells of the Barrow-wights about which whispered tales spoke. He dared not move, but lay as he found himself: flat on his back upon a cold stone with his hands on his breast.[45]

「どこにいるんだあ？」かれは腹を立てそして心配しながらもう一度叫びました。

「ここだ!」と声がしました。低い冷たい声でした。土の下から聞こえてきたようでした。「わたしはお前を待っているのだ!」

「違う!」フロドはそういったものの、逃げ去りませんでした。膝が立たなくなったのです。そしてばったり地面に倒れました。何も起こりません。音も聞こえません。ふるえながらかれは上を見ました。すると背の高い黒っぽい姿が星空に浮かぶ影のように立っているのがちょうど目にはいりました。それはかれの上に体を屈めました。かれは二つの目を見たように思いました。それはずっと遠くの方から射してくる青白い光を受けて光っている、とて

も冷たい目でした。それからフロドは鉄よりもさらに強く、さらに冷たい手でむんずと掴まれました。その氷のような感触には骨まで凍る思いでした。それ以上もう何も憶えていませんでした。

ふたたび正気づいた時、とっさには恐怖のほかは何一つ思い出せませんでした。それから突然自分が囚われの身となり、絶望的な状態に陥ったことを知りました。フロドは古墳の中にいました。塚人がかれを捕まえたのです。そしておそらくすでに、噂話に語られたかの塚人たちの身の毛のよだつような呪文をかけられてしまったのでした。かれは身動きする勇気もなく、気がついたときのままの姿勢で、冷たい石に背中をあて、胸に両手を置いてじっと横になっていました。[46]

フロドの横には、他の三人のホビットが白装束に金の宝物で身を飾られ、死人のように青ざめて横たわっており、三人の首には一振りの長い抜き身の剣がわたして置かれていた。そして塚人のまじないの歌が聞こえてくる。

Cold be hand and heart and bone,
and cold be sleep under stone:
never more to wake on stony bed,
never, till the Sun fails and the Moon is dead.
In the black wind the stars shall die,
and still on gold here let them lie,
till the dark lord lifts his hand
over dead sea and withered land.[47]

冷えよ、手と胸と骨、
冷えよ、石の下の眠り。
石のふしどに、もはや覚めるな、
日が絶え、月が死ぬ時まで。
黒い風に、星々も死ぬだろう。
その時もなおここの黄金の上に、
横たわっておれ。
死んだ海と枯れた陸を、
冥王がしろしめす時まで。[48]

フロドが呪縛を振り払うように、忍び寄ってきた長い腕の手首のあたりを剣で切りつけ、トム・ボンバディルが万が一の時に歌うようにと教えてくれた歌を歌うと呪文が破られ、ホビットたちは、駆けつけたトム・ボンバディルによって無事救出される。ホビットを襲ったこの 'Barrow-wights' とは一体何者なのだろうか。トムによれば、塚に埋葬されているのは、古のヌメノール王国の末裔の王たちであり、かれらは冥王と敵対しアングマールのカルン・ドゥームの魔王と戦ったのだという。[49] それを確認するかのように、メリーは呪いから醒めた時、「カルン・ドゥームのやつらが昨夜われらを襲ったのだ。そしてわが陣営は敗れた、ああ!予の心臓に突き刺さった槍の穂先!」と口走り、魔王と戦い敗れた古の悪夢が再現されていたことを語る。また上に引用した塚人たちの呪文も、彼らが冥王サウロンの僕であることを明らかにしている。したがって塚人とそこに埋葬されている王とを、同一視することは出来ない。塚人の正体は、民間伝承において自分が埋葬された墓、特に宝物に出没する幽鬼——Old Norse（古ノルド語）では*draugr*——[50]ではないということになる。ただし、これと

矛盾するように思われるが、トムがホビットたちに塚人の出現について語ったところによれば、人気の絶えた山々に「はるか遠くの暗い場所から一つの影が現われ、塚の中の骨たちが呼びさまされ」、塚人たちが歩き始めたのだというのだ。[51] つまり、サウロンによって死から呼び覚まされ邪悪な存在となった王たちが、塚人だということである。矛盾しているようだが、ここで思い出したいのは、墳墓は、『指輪物語』の時代の中つ国（ミドル・アース）においては、何千年も昔の先史時代の遺跡だということである。数多の死者の中には、サウロンの支配下に入り塚人となった者もいれば、そうでない者もいるということであろう。墳墓が築かれ、大古墳群となったのは、人間の王国間の戦いが何代にもわたって繰り返された結果の、「死」の累積の表象なのである。したがってこの場合、塚人と埋葬された王との関係を一対一で求めるのではなく、先史時代の墳墓にまつわるフォークロアのレベルでのイメージに注目すべきなのだと思われる。トールキンは塚人に関する 'whispered tales／rumour' の存在に二度にわたって言及しているが、[52] まさにここで描かれる塚人の恐怖は、墳墓についてホビットが囁き合って伝えられてきた伝承、古の墳墓にまつわるポピュラーイメージを映し出したものと考えられるのである。

先史時代の墳墓は、『ベーオウルフ』では、ドラゴンがその宝を護る古の墳墓として登場している。その宝の由来は次のように語られている。

> その土窟の中には、その昔人々の中の或る者が身分貴き家の夥しき遺産、貴き宝を思慮深くも其処に隠ししまゝに、斯の如き古き宝物数多あるけるなり。これより先、死は彼ら（一族）総てを運び去り、而してこの時なほ其処に最も永く活動したりし、人々の宿将らの中の一人は友の死を嘆くこととなりぬ。全く用意整ひたる一つの新しき塚、海波に近く、崖に寄り添ひ、防塞に固められて平地に在りき。宝環の主は此内へ、秘蔵に値するあまたの宝物、飾りつけたる黄金を運び入れ、そこばくの言の葉を語りぬ。「土地よ、（人々これを所有し）得ざりければ、今や汝貴人の財を保て。」[53]

この古の一族の唯一の生存者が築き、その中に宝を運びいれた塚を、後にドラゴンが占有したわけである。上の引用で「塚」と訳されているのはOEで '*beorh*' すなわち 'barrow' であるが、これは墳墓であり死者の宝を封じ込めた、生者には禁断の領域である。そこに外から侵入したのは「燃えて塚訪るゝ老いたる夜の掠奪者」ドラゴンであり、その宝庫から杯を盗み出した盗人である。このような生者と死者との間に敷かれていた「境界」を侵犯した者のイメージが、死から呼び覚まされて歩き回る塚人にも重ねられているようである。

先史時代の墳墓にまつわるフォークロアの形成において、アングロ・サクソン期、先史時代の墳墓は処刑場としても使われていたという事実も重要だと思われる。墳墓が絞首刑、斬首刑が行われた場であったことが、考古学調査から明らかになっている。[54] 古英語の「挽歌」の一つに数えられている「妻の嘆き」（*The Wife's Lament*）という詩に登場する女性は、樫の木の下の「土窟」（上の『ベーオウルフ』の引用一行目で使われていたのと同じ言葉）に棲み、幸福の喪失を嘆き悲しんでいるのだが、センプルは、彼女は生者ではなくその場で処刑され埋葬されて、その場に取り憑いた死者の霊ではないかという解釈をしている。[55] また、墳墓を犯罪者の埋葬場所としたのは、犯罪者たちが死後このような墳墓に棲む悪霊に苦しめられることを意図したのではないかという指摘もある。[56] 先史時代からの長い時の経過の中で、墳墓には死者とその忌むべき霊の重層的なイメージが堆積されているわけである。トールキンの塚山丘陵の墳墓群も、限られた命のホビットには計り知れないほどの時を経た、何千年も昔の人間たちの墓である。そこに埋葬された者ではなくとも、そこには先史時代の埋葬塚ならではの、「死」の恐怖のイメージが重く漂っているわけである。また、墳墓は地名の語源

研究によれば、ドラゴンだけでなく、ゴブリン、エルフ、ウォーデンとの結びつきがあり、こうした結びつきは、後世のものであると考えられている一方、墳墓が超自然的な生き物が取り憑く場であるという認識を示すものとも考えられる。[57]

このような先史時代の墳墓にまつわるフォークロアが、トールキンが描き出した塚人および墳墓にも、投影されているのだと思われる。塚山丘陵の墳墓群は、中つ国（ミドル・アース）の「時」の深淵が顔を覗かせるトポスである。それと比較すると、ロヒリムの墳墓に流れる五百年の年月は、不死の存在であるエルフに言わせれば「束の間としか思えない」[58]ものに過ぎない。しかしロヒリムの騎士たちにとっては、「ずいぶん昔のこと」に思われ、「それ以前のことは縹渺たる時のかなたに没し去って」いる。[59]中つ国（ミドル・アース）で最年長のトム・ボンバディルにとっては、墳墓に埋葬された人間たちは、個人的にその記憶を懐かしく追想する存在であるが、ホビットにとっては「縹渺たる時のかなたに没し去って」、集合的な漠然たるイメージしか抱けない相手である。したがって塚人は、ホビットという死すべき運命の者の視点から見れば、ロヒリムを包む英雄的なオーラもない、もっと剥き出しの「死」にまつわる負の集合的イメージであると言えよう。

ロヒリムの王たちが眠る墳墓、ボロミアの船葬、そして塚山丘陵の墳墓群と塚人――トールキンの中つ国（ミドル・アース）において、死すべく運命づけられた者たちにとっての「死」の表象は、以上見てきたように、アングロ・サクソンや先史時代にまつわるさまざまなポピュラー・イメージを絡めながら、『指輪物語』の主題と深くかかわる、心象風景を構成しているのである。

1 *Letters of J. R. R. Tolkien*, ed. by Humphrey Carpenter (London: George Allen & Unwin, 1981), p. 246.

2 Sutton Hooと同様の船葬は、スウェーデンで二カ所見つかっているのみで、時代的にはSutton Hooと同時期か少し後のものである。むしろスカンジナヴィアの葬送儀礼では、船に遺骸をのせて火を放って海に流す形が記録されている。Cf. Christa Maria Löffler, *The Voyage to the Other World Island in Early Irish Literature* (Lewiston: Edwin Mellan Press, [1983(?)]), p. 297.

3 Rupert Bruce-Mitford, *The Sutton Hoo Ship Burial: A Handbook* (London: British Museum Publications, 1979), pp. 93-97; cf. James Campbell, 'The Impact of the Sutton Hoo Discovery on the Study of Anglo-Saxon History' in Calvin B. Kendall and Peter S. Wells, ed., *Voyage to the Other World: The Legacy of Sutton Hoo* (Minneapolis: University of Minnesota Press, 1992), pp. 79-101.

4 Roberta Frank, '*Beowulf* and Sutton Hoo: The Odd Couple', in *Voyage to the Other World*, pp. 47-64 (48).

5 '*Beowulf* and Sutton Hoo' , pp. 48-49.

6 *Beowulf: with the Finnesburg Fragment*, ed. by C. L. Wrenn, rev. by W. F. Bolton, (1953; London: Harrap, 1973), pp. 45-46.

7 '*Beowulf* and Sutton Hoo' , p. 47.

8 J. R. R. Tolkien, '*Beowulf*: The Monsters and the Critics', in Christopher Tolkien ed., *The Monsters and the Critics and Other Essays* (London: George Allen & Unwin, 1983), p. 20.

9 *Beowulf: an edition with relevant shorter texts*, revised by Bruce Mitchell and Fred C. Robinson (Malden: Blackwell, 2006), p. 8.

10 『ベーオウルフ』厨川文夫訳, 『厨川文夫著作集』上巻, 金星堂, 1981, p.7.

11 同上, p. 11-12.

12 Tolkien, 'Appendix F' in *The Return of the King* (London: George Allen & Unwin, second ed., 1966), p. 414, n.1.

13 T. A. Shippey, *The Road to Middle-earth* (1982; London: Grafton, 1992), p. 112.

14 Tolkien, 'English and Welsh' in *The Monsters and the Critics and Other Essays*, ed. by Christopher Tolkien (London: George Allen & Unwin, 1983), p. 162.

15 T. A. Shippey, *J. R. R. Tolkien: Author of the Century* (London: Harper Collins, 2000), pp. 91-92.

16 *The Road to Middle-earth*, pp. 111-12.

17 *The Road to Middle-earth*, pp. 111-12.

18 'Appendix F', p. 414.

19 Tolkien, *The Two Towers* (London: George Allen & Unwin, second ed., 1966), p. 111.; J. R. R. トールキン『指輪物語　新版』全三巻, 瀬田貞二・田中明子訳, 評論社, 1992, 『二つの塔』, p. 180.

20 *The Two Towers*, p. 112;『二つの塔』, p. 181.

21 *The Two Towers*, p. 112.

22 『二つの塔』, pp. 181-82.

23 Takami Matsuda, 'The *Ubi Sunt* Passages in Middle English Literature', *Studies in English Literature*, 24 (1983), 65-81.

24 Cf. Maria Jose Mora, 'The Invention of the Old English Elegy', *English Studies*, 76, no. 2 (1995), 129-39.

25 Translation by Benjamin Thorp in *Codex Exoniesis* (New York; AMS Press, 1975), pp. 291-92.

26 『王の帰還』, p. 184; *The Return of the King*, pp. 117-18.

27 *The Return of the King*, p. 254.

28 『王の帰還』, pp. 421-22.

29 Frederick Klaeber, 'Attila's and Beowulf's Funeral', *PMLA*, XLII (1927), 255ff.

30 Martin Puhvel, 'The Ride Around Beowulf's Barrow', *Folklore* 94 (1983), 108-112.

31 *The Road to Middle-earth*, pp. 14-15.

32 Shippey, 'Goths and Huns: The Rediscovery of Northern Cultures in the Nineteenth Century', in Tom Shippey, *Roots and Branches: Selected Papers on Tolkien*, Cormarë Series no. 11 (London: Walking Tree, 2007), 133.

33 'English and Welsh', pp. 191-12.

34 *The Road to Middle-earth*, p. 14.

35 *The Road to Middle-earth*, p. 115.

36 *The Road to Middle-earth*, p. 115.

37 *J. R. R. Tolkien: Author of the Century*, p. 176.

38 *The Two Towers*, p. 19.

39 『二つの塔』, pp. 18?19.

40 *The Two Towers*, p. 274; 『二つの塔』, pp. 463-64.

41 *The Two Towers*, pp. 19-20; 『二つの塔』, pp. 19-21.

42 *The Fellowship of the Ring*, p. 148; 『旅の仲間』, p. 245.

43 「東側」とわざわざ書いているのは、「東」が不吉な忌むべき方角だからである。この章に先だって、トム・ボンバディルはホビットたちに「もしかれらがたまたま道に迷って古墳のそばに出てしまうようなことがあればその西側を通ってやりすごすように」と忠告している（p. 240, 傍点私)。

44 *The Fellowship of the Ring*, p. 148; 『旅の仲間』, p. 245.

45 *The Fellowship of the Ring*, p. 151.

46 『旅の仲間』, pp. 249-50.

47 *The Fellowship of the Ring*, p. 152.

48 『旅の仲間』, pp. 251-52.

49 塚に埋葬されていた短剣を、トムはホビットたちに与えるが、これらはヌメノール王国の末裔の手で鍛えられたものだった。後にペレンノールの平原の戦いで、ホビットのメリーはナズグルの長となったこのアングマール

の魔王に、塚の剣で切りつけ痛手を負わせるわけだが、それが可能だったのは、その剣がアングマールの魔王を倒す目的で作られたものだったからである。

50 Shippey, 'Orcs, Wraiths, Wights; Tolkien' s Images of Evil', in *J. R. R. Tolkien and His Literary Resonances*, ed. by George Clark and Daniel Timmons (Westport: Greenwood Press, 2000, pp. 183-198 (194).

51 『旅の仲間』, p. 234; *The Fellowship of the Ring*, p. 141.

52 *The Fellowship of the Ring*, p. 142, p. 151; 『旅の仲間』, p. 234, p. 250.

53 『ベーオウルフ』, p. 79.

54 Sarah Semple, 'A fear of the past: the place of the prehistoric burial mound in the ideology of middle and later Anglo-Saxon England', *World Archaeology*, 30 (1998): 109-126 (111).

55 'A fear of the past', p. 111.

56 A. J. Reynolds, 'The definition and ideology of Anglo-Saxon execution sites and cemeteries', cited in 'A fear of the past', p. 111.

57 'A fear of the past', pp. 111-12.

58 『二つの塔』, p. 181; *The Two Towers*, p. 111.

59 『二つの塔』, p. 181; *The Two Towers*, p. 112.